

□ 変化しつつある大月市

「大月市ってどこ？」地図帳の針の穴ほど小さい町を訪ねて私は下り電車に乗る。東京の新宿で生まれ育ち、昨日まで新宿の京王プラザホテルの真ん前が職場だった私には、なんだか都落ちの感すらする。それが頂点に達したのは校門に立った時である。「これが大学？」と思わず自問していた。それほど広くないグラウンドには付属の高校生が運動をしており、二つしかない建物は高校と共有だった。わけもなく前途多難な気持ちに陥った二十年前。

そして今片道二時間余かけて、神奈川から東京、山梨と三県にまたがって通勤することは変わりないけれど、大月の街そのものは少しずつ変化してきた。東京駅発大月行きの赤電（中央快速）が乗り入れられるようになり、大月市民は山梨

県内意識よりも東京圏内意識が次第に強くなりはじめている。あの狭かった校舎も二つの新校舎が建てられ、付属高校とも近い将来分離するめどもつきはじめている。私自身、大月も「住めば都」で週四日、自然と触れ合える居心地よさを満喫。そしてなによりも少人数の学校で授業を創造しやすいことが魅力にすらなっている。

□ 本学の特徴

昭和二十九年、大月市の誕生を記念して、翌三十年に開校した大月短期大学。経済の単科大学で男女共学（初期の頃は男子が多かったが最近では女子が九割）。一学年定員二百名で全学で四百名強、それを非常勤の教員を含めて四十名で指導している。つまり規模としては全国一、二の小規模の短期大学である。が、「山椒は小粒でもぴりりと辛い」ではないが、

規模はちいさくとも四年制大学と変わらない授業科目をもっている。また、入学した時点で卒業後の進路に合わせて授業を選択履修できるように、次のような配慮をしている。

① 経済学をもつと理論的に研究しようとする者および四年制大学三年次編入希望者のためのもの。三年次編入合格者数は、全国公立短期大学五十四校中第一位の実績。

② ビジネス界で活躍しようとする者のためのもの。二年間で本学を卒業した後、高度の税理、会計事務所等の職場で活躍しようとする者、公認会計士および税理士試験の受験を希望する者のために、簿記学・会計学・商法・税法等の理論科目と、これらを実践的に修得できるよう、関係科目の演習が並行して履修できる。もちろん、ワードプロセッサの授業も開設されている。

③ 情報処理技術に関するもの。コンピューター関係の授業は全国の短大中一番早



く開始され、十年以上の実績があり、平成三年度の新校舎への移転にともない全部新機種に交換。コンピュータの理論を把握させるのみならず、プログラマー

として実際に活躍できるよう、コンピュータ関係授業科目を開設。受講者が情報処理技術者試験に合格するよう充実した授業をめざしている。

④教員免許状取得を希望する者のために、中学校社会科教員の資格がとれるよう教科と教職の専門科目が用意されている。

□ 毎年一〇〇%の就職

理論を踏まえ、たうえで実際に仕事ができる短大生ということで、就職は毎年一〇〇%達成している。製造業、卸小売、情報・サービス、金融・証券・保険、建設業など多様である。また、公務員関係も少なくない。

□ 市立にこだわって

公立大学は、全国的規模での公教育の一環をになつていて、同時に設置自治体の設置趣旨と理念をも考慮せざるをえない。本学では十数年前からこのこと論議が盛んに行われ、十二年前の昭和五

十六年度より「地域社会への寄与」を目的として、次の三つの事業が実施されて今日に至っている。

①特別聴講生制度

本学の開講科目（今年は十九科目）を市民に開放し、市民の生涯教育の一環を担っている。今年は八十四名の受講生があり、あわせて地域文化の向上と発展に資することをめざしている。つまり、学生と市民が肩を並べて受講するのだ。

私も心理学をこのために市民に開放しているが、授業実践の点から言えばかなりシンドイ作業だ。つまり、十八歳の学生にも、二十代から七十代の主婦にも、退職した元校長にも、現役の教育関係の研修生にも「わかる」授業が要求されるからだ。板書の文字もアルファベットは控え目に、外来語はできるだけ日常語で、専門用語は生活事象で必ず説明して、と配慮を常に求められる。

ともあれ、この制度は好評で毎年増加傾向にあり嬉しい悲鳴をあげている。な

げなら、学生の勉学条件の悪化（一クラスの人数の増加）をひきおこす矛盾をはらんでいるからである。

②地域研究室の開設

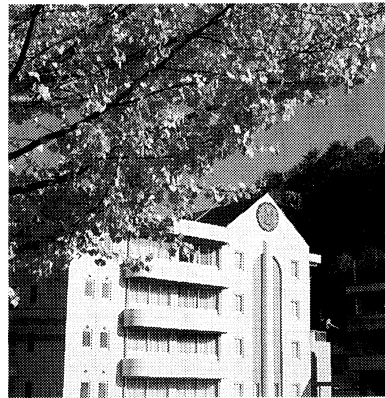
大月市を中心にした山梨県内地域の諸問題に関し、人文・社会・自然ならびに産業・経済等の諸領域にわたる調査、研究をおこない地域に寄与する。

③市民のための相談室

市民の生活の安定と向上と発展に寄与することをめざして、無料で市民の相談に応じている。今年には法律相談と教育相談を行っている。

□ 今後の課題

少人数教育をモットーにして、特に学生全員なんらかのゼミに参加できるように考慮している。一年で教養ゼミが、二年で専門ゼミが用意されている。地元の富士山を利用しての野外研修をはじめ、地域の商店経営者とタイアップしての具体的調査、教育実習前の合宿による実技



指導まで、各々教員が自分の本領を発揮してとりくんでいる。

一時期、経営を意識して学校規模を巨大化させてしまった結果としてのマスプロ教育。そこで教員と学生が味わう疎外感。少なくとも、私たちの大学では、その疎外感から解放され、どうしたら、もっと学生の信頼関係に支えられた「密度の濃いよい授業」をつくりだせるか、その可能性をもっている。

公立ゆえ、授業料は相対的に安く学生

に歓迎されているが、八割が山梨県外ゆえ下宿をしている。そのことは地元地域にとつて学生の消費生活費がもたらされるという点ではメリットではあるが、不景気の際、下宿してまで（授業料以外に生活費までかけて）遠方からくるだろうかなどを考慮すると、今後は新しい観点での募集と、もっと個性化された学校運営が求められることになる。目下、そのようなことをめぐって議論が続けられている。

（むらこし・ようこ）

